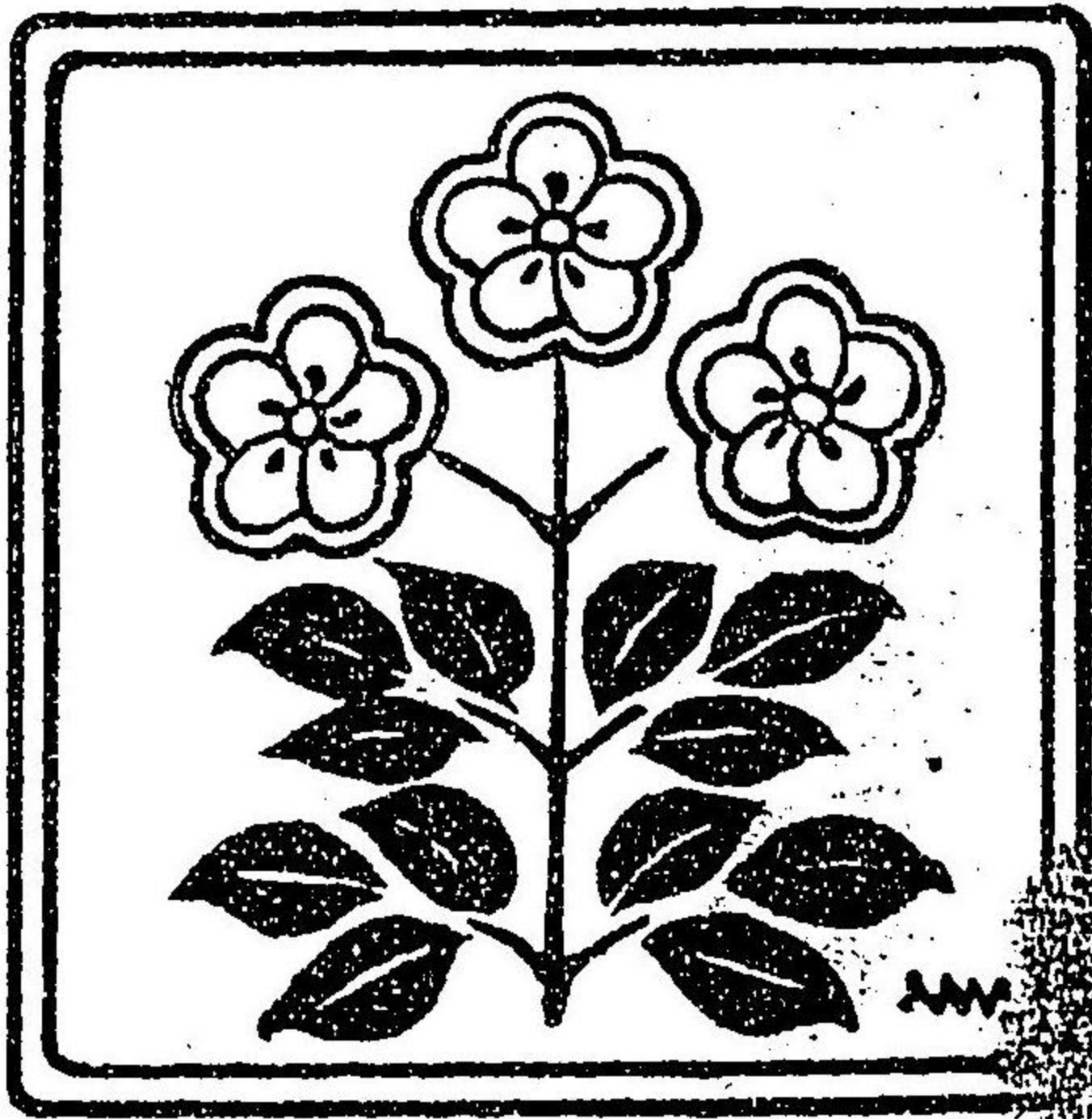
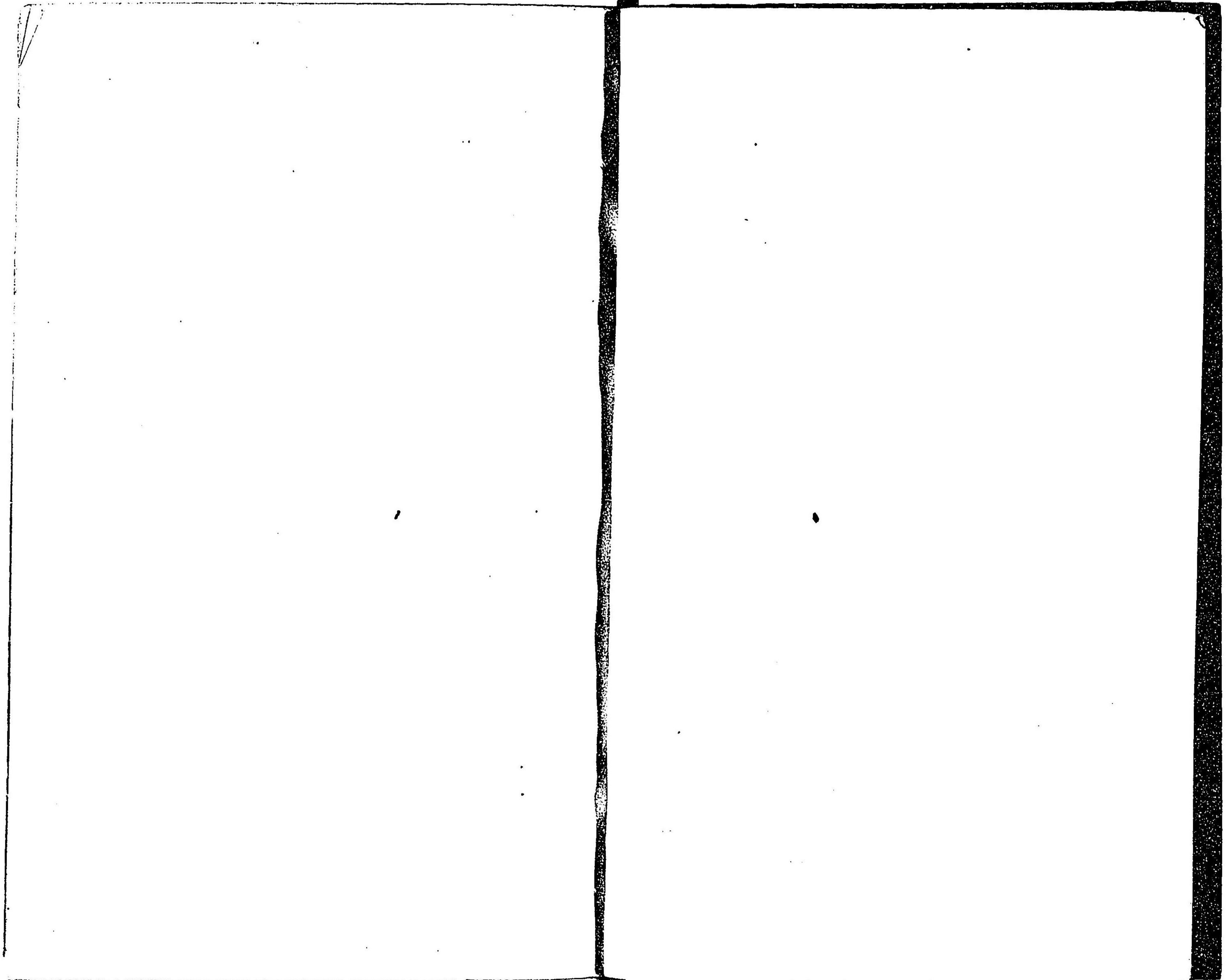


98
243

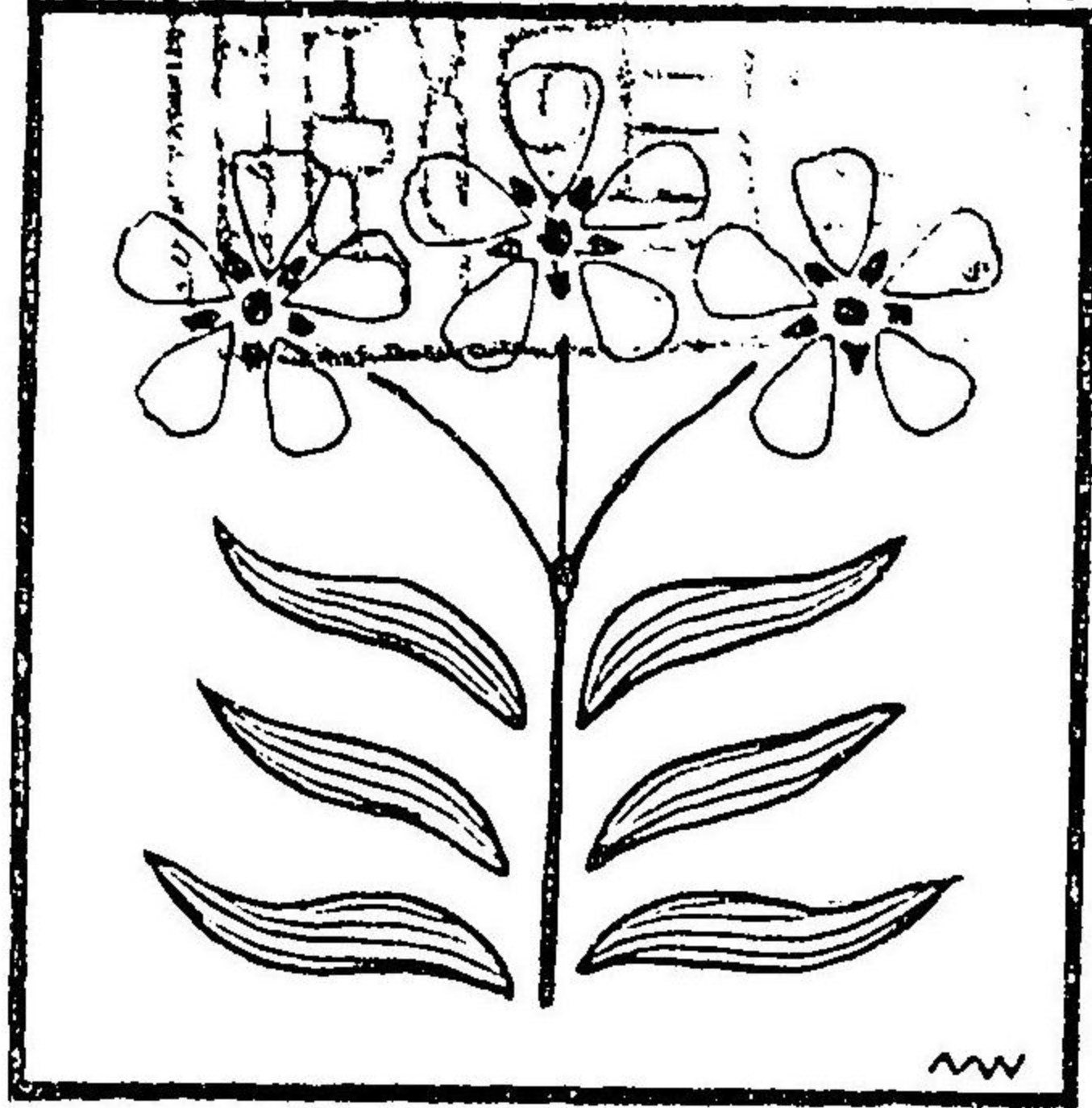
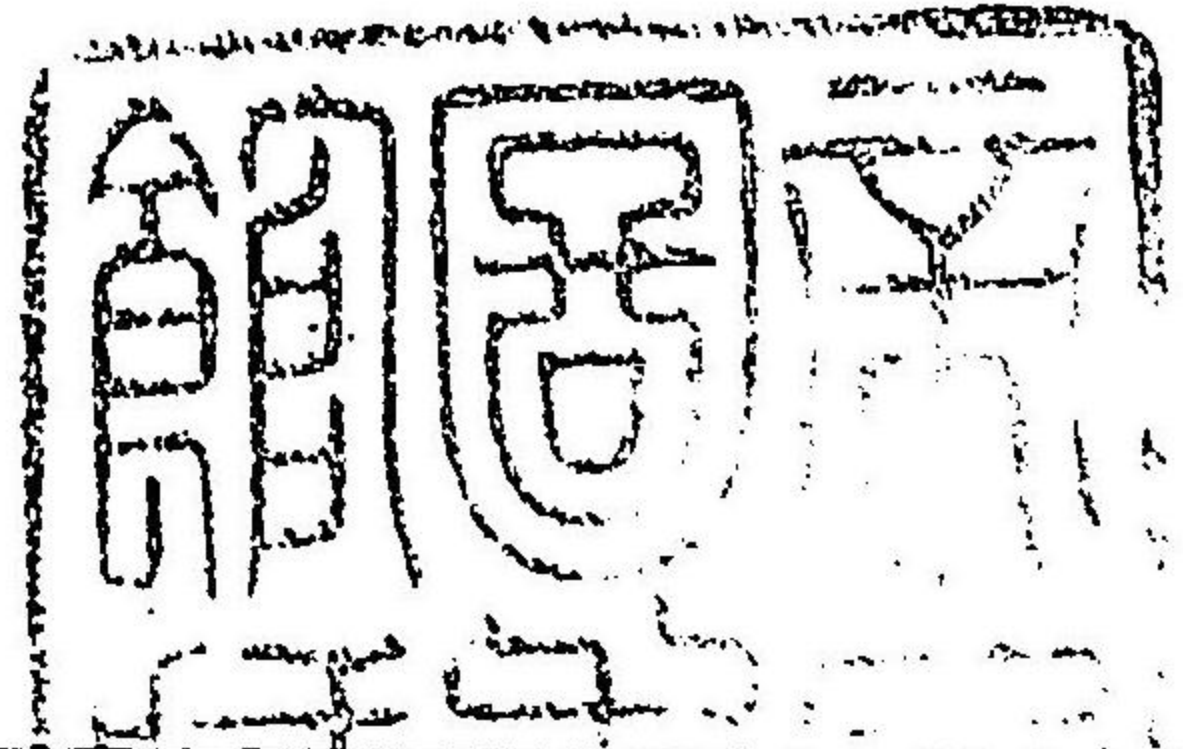
霧

河井醉茗作

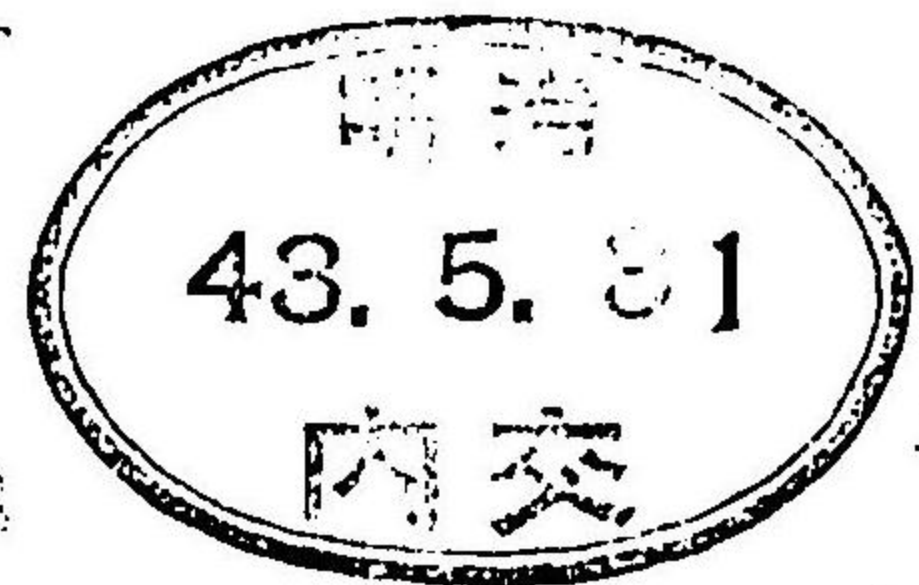




98-147



霧





S. OKADA

目次

○ 蒼色の雨……………一

翠せぬ家……………三

雪 炎……………五

瘴 攀……………六

圓い顔と細い顔……………八

暗い濱邊……………一〇

禮 拜……………一三

ためらひ……………一五

泣 き 聲……………一七

次目

旅情……………六三

お窓の姉さん……………六七

曉鐘……………六九

晚鐘……………七一

光の下にて……………七三

野……………七四

松風……………七六

翼の響……………七七

揺れる花……………七九

すれちがひ……………八一

涙……………八三

次目

脈搏……………八五

窓のあかり……………八七

舞臺……………八九

都會の足音……………九一

闇夜……………九三

力のない日……………九五

無意味……………九七

きもの……………九九

花辨……………一〇三

信濃町の月夜……………一〇六

山頭火……………一〇九

次目

非人間……………一一一
 塀の外……………一一三
 夢の杜……………一一五
 我まで来た人……………一一六
 つぶて……………一一八
 戀の詩……………一二〇
 空虚……………一二一
 暮れたばかり……………一二二
 肉聲……………一二六
 毛髮……………一二七
 鼓の音……………一二九

次目

若氣……………一三一
 應病……………一三三
 うたゝね……………一三五
 場末……………一三七
 道ゆき……………一三九
 塵烟……………一四四
 寒い日……………一四六
 消えゆく日記……………一四八
 秋の湖畔……………一五九
 水が無い……………一七〇
 海邊の娘……………一八〇

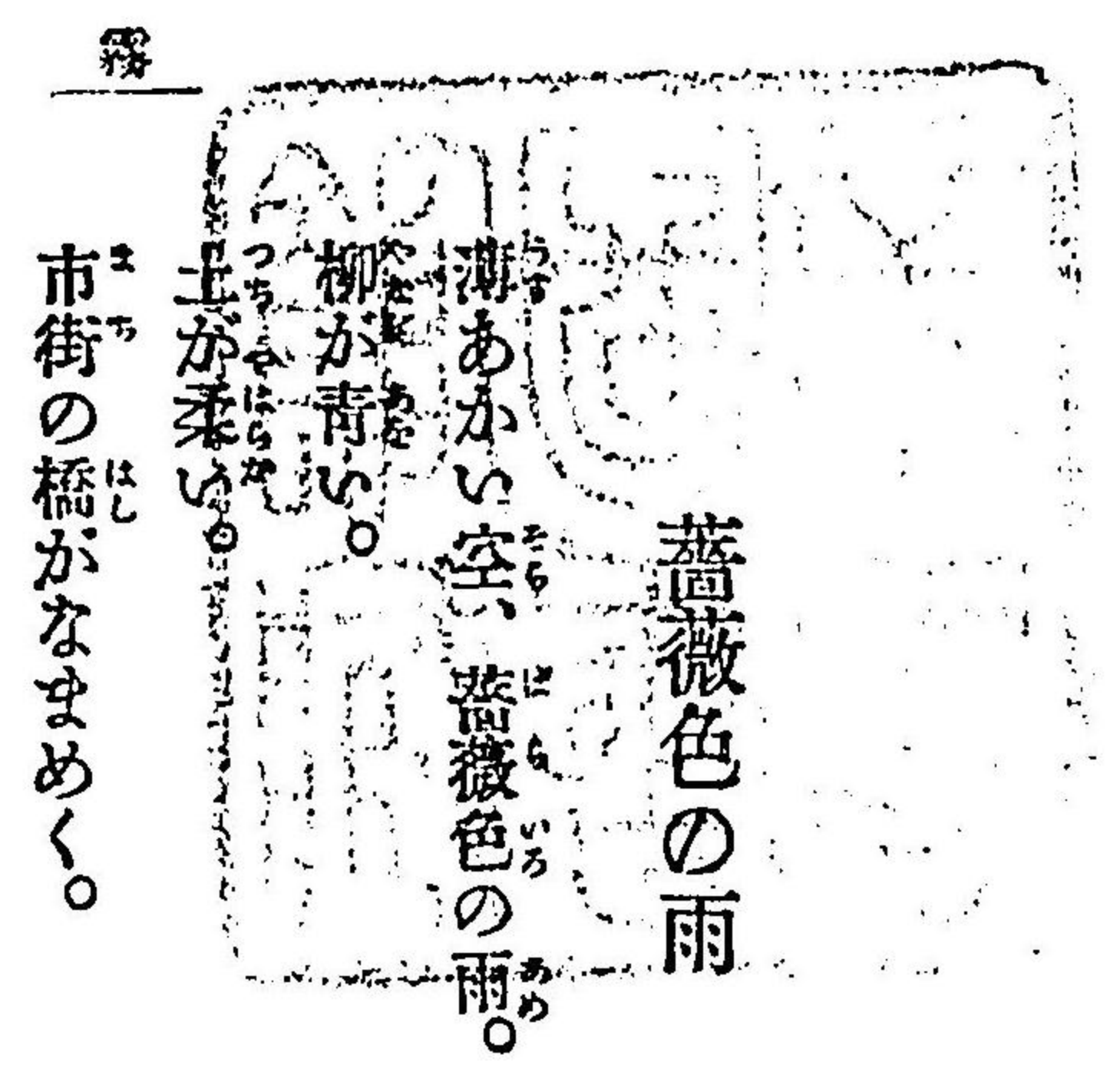
次目

旅 集……………一九三

表 紙……………長原 止水

巻 頭 畫……………岡田三郎助

霧



河井醉茗作

鳥のよろこび、心のゆるび。
 傘の雫が甘いやう。
 濡れた女の袖が、紫の木蓮のやうに萎れてゐる、重くて地に落ちさう。
 足袋を脱ぎたい、素足の心持になりたい。
 衣服の上前の染が油のやうに泌む。
 いつも顔が汚れてゐるやうに思はれるけれど洗はうともし
 ならぬ。

聲せぬ家

母親は母親らしいことを考へて居やう。
 姉は姉らしいことを思ふて居やう。
 父は父らしい仕事をしてゐやう。
 家の内は寂然として一人も物を言ふものがない、次の室、
 其次の室にも人は居るのだけれど、居るとも思はれぬやう
 な物足らぬ家。
 曇つてゐるから時間が分らぬ、午後には相違ないけれど、

鈍い光線だ。
 垣根の外を途切れ〜に人が通る。
 遠くの方で人の話聲がする。
 何うしたら宜からうと、其ればかり繰返してゐるので、若い胸には何の解決もつかない。
 起つて次の室へ聞きにゆかうとも思はぬ。
 尊い刹那が斯うして過ぎて行く。
 世の中は一刻毎に變つて行く。
 何うしたら宜いか分らぬ。

雪 炎

土手の片蔭に雪が残つてゐる、雪の上を月が照らしてゐる。
 月にも色はない、雪にも色はない。
 月の光と、雪の息とが縫れ合つて、冷たい陽炎が立つ。
 ちら〜と眩しい、白いやうな、青いやうな、紅いやうな
 織い炎が燃ゆる。
 北國に行くと、雪の炎の間から白い女の顔が見えるさうだ。

痙攣

熟睡て居た。

痛う、痛う、痛う。

誰か自分の脰を噛んだ、いや噛んだのではない肉を撈り取るのだ。

猛獸だ、牙でやられたのだ、もう肉の一部は取られて了つた。

毒蛇も居る、纏ひついてゐる、締めつけて居る、血を吸ふ、

骨が碎ける、毒は全身を胃さうとしてゐる。

眼が暗い、風が吹いて居る、石が飛んで居る。

女の柔かい手も交つて居る、撫でられると堪らなくしびれる、放してくれ、放してくれ。

絞るなら快よく血を絞つてくれ、古い血、腐つた血、一瞬に絞つてくれ。

あゝ持つて行くのか、持つて行くなら身體ごと持つてゆけそとだけ肉を取られると痛う、痛う。

圓い顔と細い顔

あさぬさんと、おはるさんとは毎朝、店頭を通つて裁縫に行く。

あさぬさんは屹度檐先をすれくに、髪をあげたり、帯に觸つたり、袖を搔合したり、嬌態をつくりながら行く。

眼が大きく、顔が圓く、美しい女ではない。

おはるさんは屹度遠く離れて、向ふ側の檐下を少し急歩に行く、傍目も觸らず、風呂敷包を大切さうに抱えて、身體

を堅くして歩いて居る。

おはるさんは顔の細い、胛脚の長い、瘦せた女だ。

あさぬさんのことを言つて、私に擲擻ふ人はあるが、おはるさんのことを言つた人はない。

廣い道幅の中央を通つて行く女は幾何もあらう。

暗い濱邊

兩個は謀し合せて、或る夕方、同じ時刻に家を忍んで出た。濱邊を歩いた、兩個の手を固く握り合つて。星が能く見える、暗い渚、海は動いて居る、漁火が揺れてゐる。

女は野に育つて、餘り海邊を歩いたことが無い。

「何故斯んなに暗いのでせう、私、海が怖い」

「斯んな静かな晩に何が恐いことがあるものか」

「波がそこまで来てゐるぢやありませんか」

「来て居たつて何ともない」

「私、何だか凄いやうに思ひますわ」

手を放して、又握つた。冷たくもなければ暖かくもない海の風が吹く。

女は途切々に思ひ出しては語る。

ざぶりくと這ふやうな波の音。

微かに燈臺の火が青い。

「何處まで行けるのでせう」

「何處までも、……併し歸らう」

無言で引返す。

引上られた船の傍で立止まつた。

「まだ恐いのですか」

「ハア何だか夜、出たことがないし、それに海があると思

ふと恐くつて」

又歩き出した。

兩個は何時の間にか明るい市街に出て了つた。

禮拜

私の役だから神燈明を上げた。

神棚の前に端座して、合掌しながら首を垂れた。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」

まだ餘り早い。

「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神やま……も

……ら……む……菅原道實」

まだ少し早からう。

「京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな、京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな、京の三十三間堂の佛の数は三萬三千三百三十三體あるといな」

もうよからう、バチ／＼と手を拍つて首を擧げた。

起つて此方へ來ると、今夜は感心に能く拜みました、何時も屹度然うするのですよと老婆さんが言つた。

ためらひ

若い男と、若い女の子が四五人賑やかに話してゐた。

誰か障子を開けた、冷たい風が來て、ふツと火が消えた。

あらツと誰やらが叫ぶ。

危いと座つたまゝの聲。

早く燈を點けなさいよと幼い聲。

マッチが有つた筈だがと其邊をかき探す、柔かい手が引込
む。

ほく／＼と艶めいた笑ひ聲。

室に籠つた女の香、衣摺れの音と微かな息、女と女とが衝突つて笑ふ。

男の胸は轟いた、暗の中で形の無いものが抑へつける、つき放す、そののかす、ためらふ、無言。

女は暫時も黙つてゐない、物を言ふ、恐れる、動く、避ける、笑ふ。

パツと燈が點いた。

泣き聲

夕方の喧騒しさ。

何處かて女の子が泣いてゐる。

吾家の子らし。

否、泣聲が異ふ、他家の子らし。

未だ泣いてゐる。

やつばし、吾家の子か知ら。

誰か見に出てやれば可いのに、何をまご／＼してゐるだら

う。

電車が響く、豆腐屋の喇叭が鳴る。

自分は其處どころでない、次から次とものを書いてゐる、
少し昏くなつて来た。

あ、また泣出した。

何だ、他家の子か。

無言の號令

一小隊ほどの兵士が市中を行軍してゐる。

美しい女とすれちがつた。

女は一人だ。

列にあるだけの兵士の眼は皆、女に向つた。

女は同じ服、同じ銃、同じ背囊、同じ歩き方、同じ顔の男
を見たばかりだ。

月の痛み

月が痛む、光を失うた月の亡骸は赤銅色をして氣絶した。
滅びてしまふやうでもあり、生きかへるやうでもあり、萎
えはてた月の面は苦痛にあへぎ、絶望にうめく。
夜の方はゆるんでゆく。
鳥は埒から落ち、人は地に躓く、葉は黒い息を吐き大地は
静かに沈んでゆく。
まだ月が痛む。

たよりない色よ、心細い姿よ、生きる勢ひはまるで失せた
地平に落ちるやうにも見えない、われ／＼に近づくやうに
も思えない、遠ざかるのだ、恐れ／＼遠ざかるのだ。

鳥

捉えて居ると思つて安心してゐると、逃出しさうにする。
 そんなに逃たければ、自由な空へ逃げて行くが好い。
 捉えて居た處で私の生命に價値がつくでもない。
 逃たものだと思つて居ると、いつのまにか胸の巢に温まつ
 てゐる。
 いつ歸つて來たのか。
 鳥よ、お前が居ると胸の巢が温かい。

けれども私は鳥を温める爲にばかりは生きてゐられないの
 だ。
 忘れることもあらう。
 冷たい血が巢に注ぐこともあらう。
 さうすると又逃出すだらう。

行け

此處には汝等より少し姿の違つたものが歩いて居るぞ。
分るまい。

危険いよ、危険いよ。

物を言ふと火がつくよ。

近づくな。

行け、行け、さつさと行け。

生きる場所が異ふ。

私の顔には何も表はれないけれど、
汝等が居ないと表はれるのだ。

あゝ表はしてみたい。

行け、行け、さつさと行け。

皆行たあとで、

八重の花弁をくづして、

私を表はしてみやう。

魚の血

腥い。

生きた魚と、乾いた魚の臭ひ。

臓腑が腐る。

大きな魚の頭を切つて、二人して重さうに擔いて來る。

赤い血が土の上に滴つてゆく。

脂肪が光りに溶解ける。

骨が見えて居る。

海の汐が血になつて、
魚の頭から落ちて居る。

土が吸ふ。

日が吸ふ。

人が吸ふ。

飯の湯氣

ほかくと暖い。

夏の花がふくらむ日だ。

太陽が座睡つてゐる。

生が倦む。

火氣に蒸されるやうな厨、肥つた女が釜から飯をうつしてゐる。

白い湯氣が竈の前に靡く。

座睡

焚きたての飯の匂ひ。

むつとする。

女に飢ゑたものは何んな女を見ても美しい。

飢ゑたものは、春の正午の飯の湯氣にさへ食指動く。

食欲が澱むのは生に疲れたのだ。

何も食べずに眠りたい。

屋根傳ひ

古い家から逃出さうと思ふけれど、締りが厳しくて逃出すことがむづかしい。

釘は腐蝕つてゐるけれど扉は重い。

窓はあまりに高い。

壁と壁との間から天が覗いてゐる。

外へ出よ、外へ出よ、外は明るい、広い。

生きて居るものが籠の裡にかしこまつてるのも苦痛だが、

出るのも苦痛だ。

古い家には綱がある。

出るところを見つけられたら引戻される、繋がれる。

知らないうちにと、二階から屋根傳ひに脱れる。

宵暗の天に星が燦めいてゐる。

ぼつと空に向つて息吐いた時の、自由な、ひろびろした心

持はなかつた。

其心持はそれなり屋根傳ひに逃して行て了つて、

やはり私は次の古い家に繋がれてゐる。

眺望

女がすねた。

面白い。

唇がゆがんでる。

通り雲に日の面が曇つた。

微塵も覺知つた氣ぶりを見せず、曇つた景色を眺めてゐると。

まじくと心の持つてゆき場所に困つて居る。

只眺めて居れば、彼の心は彼に返つて行く。

眺めてゐるうちに日があたつてくる。

何のこともなす。

石

野は平かに大和國原を秋風が吹きわたる。

稲の穂はそよくと靡いてゐる。

突兀として何處から投げられたとも知れぬ大石が、半は土に埋れて、稲穂の間に現れて居る。

大和は石が多い。

山から流れて来た岩でもない、天から落ちた星の屑でもない。

太古から野に在るのだ。

ひろくとした野中の石に秋風が吹く。

消ゆる雲

小さな雲が浮いて居る。

凝視して居るとだん／＼、だん／＼小さく、薄くなつて来る
眼を放したらひろい大空に見失ふであらう。

遂にうす／＼なつて消えて了つた。

又次に小さな雲を見つけて、凝視して居ると、それも頓て消えて了ふ。

消えた雲は滅多に現れないと思つた。

細君

獨身の男は得意氣に語つた。

彼處の夫婦は外見にあんなに睦じさうに見えて、何も苦情
がなかりさうだけれど、僕が主人の居ない時に細君からし
み／＼打ちあけた話を聞いた。

溫和く見えて居ても、腹が立つと細君の衣服を裂いたり、
櫛を折つたり、随分亂暴をするさうだ。

それで前途の見込があると云ふてはなし、私ばかり四方八

方へ氣無して、苦勞しても甲斐がないのですもの。と悄然て居た。

そんなことを矢張僕に訴へるのだからね、

何うも女と云ふものは皆あゝしたものか知ら、

と、獨身者は得意氣に語つた。

旗

赤い旗を出す、電車は止る。

青い旗を出す、電車は通る。

電車は五つの軌道を分れて行く、少しもたまらない。

赤い旗を出す時に青い旗を出し、

青い旗を出す時に赤い旗を出したら何うなるだらう。

旗ふりは意識がある。

意識の無い旗ふりが居て、何處かて勝手に青い旗や、赤い旗を出してゐるやうだけれど、人は知らない。

草

草が延びる。

草花は餘り延ばさないで、早く摘んで、末を止めて置く方が好い花の咲くと云ふことは知つてゐる。

けれども見すく青い葉を開いて、莖が延びてゆくのに、何うも摘まれない、延びるだけ延ばしても花は咲くならう。

こんな延ばしてはいけない、自分には摘みにくいものだ、

僕が摘んでやろうと、友人の一人はコスモスの先を皆摘んで行つた。

摘まれた草は早く苔を持つた、株も張つた。

摘まない方は、ひよろ長く延びて未だ苔を持たない、風吹くたびにひよろくしてゐる。

早く痛めて置けば宜かつたと思ふ、でも今更摘まれない。

轉宅

裏長屋の端の家では移轉する、下町では生計がたたぬと云つて、場末の方へ移るのだ。

『何うもながくお世話様になりました』

と合長屋の人達にも内儀様が挨拶に廻つた。

『オヤマア然うですか、折角お馴染になりましたと思つてよろこんで居りましたのに、何うぞ此方へ入らしつたら是非お寄んなさいよ、電車ならわけありませんよ、三ちゃん

アバヨ、又おばさんところに入らつしやい、可愛いのね、好い顔をして』

如何にもお世辭が好い、流石棟を同うして居ただけに別れる時になると、親切らしい言葉を使ふ。

お内儀さんは近所合壁に暇乞ひして行て了つた。

まだ一町も行くまいと思ふうちに其噂が出た。

「ヤレ／＼助かつた、彼んなお内儀さんたらありあしない、襦袢は終日軒に掛けどうし、子供は泣かせる、溝の淺は知らないふりしてる、それで亭主の自慢ばかりしてやがる、何うせ何處へ行たつて續くもんぢやありあしない、世間體

と云ふものがありませぬね』
と又小一時間、去つた人の悪口で持切る。

トンネル

電車はトンネルに入った。
電気が黠いた。
今まで活々して居た人の顔が、一時に色が變つて了つた。
人間でないやうな顔になつた、凄、鋭、淋しい、強い
赤い、黒い、隈のある顔ばかりだ。
着衣の色が皆萎れた、夜の光の下なら美しく見える筈だが
美しくない。

不安の色が顔から顔に漂うた。

女の頬は俄に削れた、男の骨は尖つた、若い人の血は涸れた。

晝の隠れ穴に落ちた人間の皮膚は、何の光澤も輝きもない日本の繪の具で描いた夕焼雲のやうだ。

その刹那に未明のやうな淺い光がさした。

忽ち人の顔は蘇生つた。

泣く女

何を泣いてゐるんとすと母親に聞いた。

何でもありませんよと母親は平氣で居る。

娘はそとくと逃て行つた、次の室へ行って矢張泣いて居るやうだ。

彼も惘然ですが今の處、何とも詮方がありませんのでと母

親は小さい聲で言つた。

成程と少しは了解つた。

此家の生活では戀の何のと贅澤なことを言へる境界ではない、勿論そんな噂も聞かぬ。

娘と同年の従弟は此間嫁入した、けれども此家の娘は縁談どころではない、眞黒になつて稼いでゐる、浮いた噂などは少しも聞かぬ、十人並だが何處となく淋しい顔だ。

母は何も彼ものみこんでゐるらしい、娘の泣くのを氣にかけない處を見ると。

母も問はぬ、娘も言はぬ、それで只折々娘は泣いて居る、然うかと思ふと忘れたやうに、稼ぎに身を入れる。

父親はへんくつものだ。

ある朝

我身の上に苦しい事件がふりかゝつて來た、けれども自分には勤めがある。

いつもの同じ時刻、同じ電車に乗る。

今朝は妙に人の顔が遠くて動いてゐるやうに見える、毎の朝も馴染のやうな意がしてゐる乗客の人々が、何だかそらぞらしく、急に他人になつたやうで、自分一人だけ運ばれてゆくやうだ。

女學生が掛けて居る巾廣のリボンも、中學生の帽子の徽章も一向氣に留らぬ、動いてゐるものに見えぬ。車掌も運転手も旗振も、皆自分に關係の無いことをしてゐるやうで、坂は上つたのか、下りたのか、今は何處を通つて居るのか、考へてみないと分らぬ。兩側の家並も、街路の日影も、今朝に限つて知らぬ顔をしてゐる、世の中とうとうしくなつた、よそ／＼しくなつた。

明るい光線が不思議になつて來た、新聞讀んで居る人が羨ましくなつた、皆人が苦勞なささうな顔して居るのが嫉ま

しくなつた、昨日まではそんなことは何ともなかつた、只明るいものは明るく、美しいものは美しくかつた。今朝は明るいものに暗い影があるやうに思ひ、美しいものに偽りがあるやうに思はれてならぬ。違つた道を歩くやうに思ひながら、毎朝來る自分の勤め場所に入つた。

鳥柱

眼界の達く限り、下は海、上は空、うちかへし立つ波、伏す波、くづる、波、萬疊の波は波に連りて、水平線のはてに雲の消ゆる時はあつても、陸や、島の現はる、日は永遠にない青海原、太古より船の影も、人の影も此海原に現れたことがない、何處から来た生物であらう。

幾千枚の白紙が飛ぶ、雪の羽が降る、ひらくと舞ふ白鳥、鳥、鳥、鳥、天から降りたか、波から生れたか、海上一面

に舞ふ。

波に乗り、水を離る、翼の軽さ、海草は沈んで見え、底なく青い海の水、水に舞ふ白鳥、疲れを知らず。

風は何んなに荒れても此鳥を海のはてに吹送ることはできない、浪は何んなに躍つても此鳥を捲込むことはできない。

透徹るやうな聲と聲とが交された、一面にひろかつてゐた白鳥は、瞬間に群をつくる、上に、上に。

天上、銀河の鵲は斜に橋を渡すとかや、これは浪に根ざして、空を支ふる鳥柱、生命あり、息あり、はてしらぬ大海

原の上に、羽と羽とて築きあげられた揺れる塔、頂上は雲に入り、根は水に入る。
 一羽來つて柱成り、一羽動いて柱くづる、浪はうねうね水平を劃り、雲はゆう／＼天に浮ぶ、はてのはてまで人間の眼到らぬ大海原、鳥柱は立つと云ふ。

曉

毎も滅多に開かない時分に、ふと眼が開いて、戸の隙間の白んでゐるのを見ると、世が新しくなつたやうに思ふ。其まゝ覺めればいゝが、またうと／＼と寝て了ふ、今度起ると太陽が射し込んでゐる、暖かくなつてゐる。何の變りもない。都會の空氣、音、色、同じことだ。

仕事、休息、考察、同じことだ。
折々新しい光を見た時には覚めねばならぬ。

橋

水源も分らなければ、終も分らぬ永い永い時間の河が流れてゐる。
自分は只、或る橋から或る橋までの間を知つてゐるだけで上流に何んな橋があつたか、下流に何んな橋があるか、知らう筈はない、知るやうに思ふだけだ。
自分の初めの橋は、其河の幾つめの橋だか分らない、假に一つと數へる、二つと數へる、數へ數へて澤山になると疲

れる、弱る、痺痺れる、躓く、然して自分の橋の終りにやれくと息を吐く。

橋の數などは忘れて了へば好い、一つが千であるやら、一萬であるやら分らないものを數へるに及ばぬ、數へきれないものを數へて疲れて居る、今くどる橋が一つだ、前も一つだ、次も一つだ、今の一つにあやまりはないけれど、次の二つは恐らくあやまりであらう。

雨

少年の頃、雨が怖かつた。

最も傘を持つてゐない時に限つた、傘を持たないと云ふ事が、恐を誘ふたのであらう。

野を歩いてゐる時でも、街を歩いてゐる時でも、はらはらと落ちて來さうな空合になると、鼓動が高まる、顔が火照る、心が沈着かぬ、歩調が亂れる、息かはづむ。黒い雲を見ると氣になつたものだ、野を歩いて、夕立雲。

でも起らうものなら、殆んど生の半分を削られるやうに感じた、今でも少しは雨を恐れる血が残つてゐる。けれども驚かなくなつた、雨降る市中を外套さへ被て居れば、平氣で歩くことかてさる、それだけ何か知ら鍛錬されたのであらう。

睡眠

起きてゐるのは自分だけだ、自分は少しも寝むたくない、誰も寝よと言はぬ。人間が悉く眠つて、起きてゐるのは自分だけなら、何故自分の魂魄はもつと目覺しく働かないのだらう、多くの人が起きてゐる時と同じだ、自分一人目覺しいことが出来ると思つたのが間違ひだ。眠つた靈魂も、起きた靈魂も同じだ、眠つた靈魂が夢に働

いてゐると言へば、覺めた靈魂も夢に働いてゐる、何の變りがあらう。

燈火を點けて置いても眠れるのだ。

眠るのはわけない、凡てのものが眠つてゐるからと云つて何うすることも出来ぬ、起きてゐても何にもならぬ。

凡て眠つてゐるものを何うかしてやりたいと思ふけれど、自分の靈魂と、他の靈魂と、眠つて居ても、起きて居ても別々に働いてゐる、自分だけ起きて居やうが、寝て居やうが、他の靈魂は關はりなしに好い夢やら、悪い夢やらを見て居る。

旅情

私は今、旅の人です、家も、事業も、世の中も忘れて、只旅の情が面白く動いてゆくばかりです、私の情はひろくとした常陸平の草の上に漂ふて居ます、私は詩を歌ひたくなりました、若い女に言葉を掛たくなりました、折から祇園祭で、村の若衆は太鼓を叩いて盆踊の稽古です、月は夢のやうに森を離れてゆきます、花が空中に躍つてゐるやうな太鼓の調に連れて、音頭取る囃し聲は手に取るやうに聞

えておきます、庭一ぱいの月に下り立つと、お才が栗の木の下に洗濯して居ますから、二言三言夜雨の平生を問ひました、多くは語りませんけれど、お才の眼には露がさらりと輝いて居ます、夏にしては涼しい晩です、太鼓の音が又一しきり高くなつてゆきますと、美くしい聲の中には女も交つてゐるやうです、私は見に行かうかと思ひましたけれど、輿を妨げても面白くないと控へました、私は今美しい詩を歌ふて居るやうに思ひますが、言葉にはなりません私は只、魂の浮いてゆくまゝに、騰波の淡海の水の上でも筑波の山の絶頂でも旅の情に任せたいのです。

椽柱に凭れたまゝ夜雨は一言もない、今夜も寂に月の沈むのを待つてゐるのでせう、沈んで行く月を見て僅に慰める心があるのてせう、私は冥想の人を醒ましたくありません私は今、晝の點火を見て居るのか知れません。けれど夢のやうな光が好きです、旅のやうな世の中が好きです、上りかけの月の色が好きです、けれども月は段々白く冴えてゆきます、微かに雲が悪ると、又雲を出ます、盆踊歌は漸く寂しくなつて來ました、花瓣が落るのでせう、野は深き眠りに入らうとしてゐます、私も眠らうと思ひます、起きて居ても、眠つてゐても同じ事ですもの、寂しくなれば眠る

までとす、私の旅には何の不安もないのです。歸らうと思はず、行かうとも思はず、おやすみなさいと云ふ、只、明日も旅なれかしと願ひながら。(筑波の麗なる夜雨の宅にて)

お窓の姉さん

前は草原、子供が能く遊んで居る。

或る家の窓があつて、其處から十三四の女の子が能く顔を出してゐる、顔の見えない時は讀本を讀む聲か、唱歌を歌ふ聲か、聞える。

子供等は窓の姉さんと呼んでゐる。

子供の居ない時は胡蝶が遊んでゐる、馬が草を食べて居る、鶏が餌を拾ふて居る、窓の姉さんはそれを見て居る。

雲も見える、林も見える、葉の落るのも、實の熟つて居る
のも見える、けれども滅多に人の来ない草原だ、お窓の姉
さんは何時までも此窓に凭るだらうか。

曉鐘

たわいない夢を眞實になつて一生懸命に見て居ると——鐘
が鳴つて来た。

夢は何處かへ行つて、
鐘は確かに枕頭まで響いて来た。
鐘の方へ行かうか、
夢の方へ行かうか、
あゝ睡い、甘い睡眠に落ちたい。

うつら／＼となる。

永い間があつたと思ふけれど、直ぐ

次の勢が根を強く打ちこんだ。

暗い中に聞いて居る。

目を覚ますには早い。

睡眠の方へ行かう。

鈴はまだ尾を曳いて居る。

まだ——まだ——

まだ——

晩鐘

隣の寺の門がしまる刻限に、鐘が鳴る。

ごーんと初めの撞出しに壓迫された魂は、

ん——ん——んと後へ顛ふ。

呼吸がひろがる。

刹那が躍る、浮くやうに沈むやうに、

刹那の影が空の彼方に漂ふて行く。

たよりない姿よ。

もう滅多に覺めないよと言つて、今にも地を踏みはづしなうに、ん——ん——ん——と微かに呻吟ながら——。

又、鐘が鳴る。

新しい力。

力は直ぐに抜けて行く。

ん——ん——と踉蹌てゆく刹那の呼吸はながい、ながい。

光の下にて

瓦斯の火や、電氣の火や、明るい光の下で若い人が澤山集つて賑やかに話してゐる時。

何處かの山林の奥、一度も人が足踏入れない深林の木立の下は二三尺の落葉が積つて、獸が走らうが、鳥が鳴かうが、木が朽ちやうが、枝が折れやうが、花が咲かうが、毒草の實がならうが、只其下には晝とも夜とも分らぬ暗黒があるばかり、今、其處に何かしら小さな小さな生きてゐるものが動いてゐると想つてみたまへ。

野

隅に通つた轍の跡が長くつゞいて、草の生た田舎道の兩側に若い林が緑してゐる。

林を抜けると、野は斜めに高まつた丘と、森と、雲と、天とに劃られて、ありふれた油繪のやうだ、ありふれた、繪にも光線と、空氣、を與へると新しい生命がある。村が見えない、離れた家も見えない、人間の影もさゝな

50

眞晝野の静かさ。

家に居ても、外に出ても、寝ても、起きても、片時も人間と離れることが出来なかつたのに、久しぶりに人間の氣の絶えた野を歩いてゐる。

人間の中に居ると人間が分らぬ。

斯うして獨り人氣離れた野を歩きながら、暫く忘れてゐた人なつかしい味ひを、しみく味ふてみたいと思ふ。

松風

少しも雑木を交へない小山の傾斜面に、同じやうな丈の若松が生えてゐる、風の音が違ふ。

絹の目をこすやうな、柔かい、細かい、如何にも細い葉を透してくる風の音。

女の着物が觸つてゆくやうな軽い、美くしい、また、清い音だと思ふ。

よせてくる音はなつかしいやうに、引いてゆく音は淋しいやうに、單調な響を繰返す若い松の晝間の想ひ。

翼の響

ふと眼が覺めた。

風が吹いてゐるとも思はれないのに、空中に響がする。寐てゐながら能く聞える。

大きな、大きな鳥が翼を一ぱい擴げて暗い雲の下で羽ばたきしてゐるやうだ。

強く打つ響
弱く収める響

しきりになしに聞える。
翼は黒いやうだ。

揺れる花

伸びた草の上に紅い花が咲いてゐる。
取らうと思つて草の中に手を入れる。
花がゆらめく。
これだらうと抜く。
手に持つたのはたゞの草、花もない、苔もない。
又手を入れる。
これかくと握つてみる。

花がはげしく揺れる。

これにちがひなからうと抜いてみると又ちがう、
ゆらくと花が動く。

また草の上に紅い花びらが揺れてゐる。

○ すれちがひ

生垣つゞきの淋しい屋敷町、捷路を取つて若い女が行く。

晝の間とは言へ人通りが無い。

向ふから書生が三人来た。

すれちがひさま一人が、姉さんと聲を掛けた。

女は顔も紅潮めずに澄してゆく。

今一人の男は、

君待ちたまへな、

と嫌な聲で言つた。

女は少し微笑んだが、姿も亂さず、歩調も急がず、平氣に行つて了つた。

書生はもう外の事を高い聲で話してゆく。

斯くて都の町には若い男と、若い女とがすれちがつて行く

涙

私は泣いたことがない。

一度あつた——十七の時——胸から出る涙の熱いことを初めて知つた。

其時のやうな熱い涙は何うしても二度と出ない。

人間の泣く時に泣けなくなつた。

何うしても泣けない。

涙か靈魂の底の底の方へ沈んで了つて、

いつかは此涙が、外に出ることがあらうとは思ふけれど、容易に出て来ない。

脈搏

醫師の来るまで、子供の手を握つて脈搏を見る。
體温三十九度。

脈搏？

時計を出してセコンドを凝視する。

約百十九。

又數へなほしてみる。

約百三十。

餘りに早い、まぢがひだ。

又數へなほしてみる。

約百〇八。

何うしても正しい數が分らぬ。

九つになる子の一分間の脈搏の數すらわれ／＼には正しく分らない。

窓のあかり

窓から火光が射して居る。

窓は四角な西洋窓で、樹立隠れに火光が透いてゐる、小さい月が屋根の上の一つ、屋根が尖つてゐたら子供が持つカードの繪だ。

前の原には霧が薄くかゝつてゐる、窓の火光が懐かしい。仕事を爲て居る人か、それなら火光がもつと明るい筈だ、書物を読んで居るにしては火光がひろすぎる、誰も居ない

のか。

いや／＼居る、屹度居るに違いない、女か、女の火光だ。室には花がある、樂器がある、油繪がある。而して女が居る、靜かに何か考へて居る。

窓の下まで行けば足音に怪んで立つだらうか、開けるだらうか、影が映すだらうか。

いつまでも／＼開けないで欲しい、そして彼の火光を毎晩見たい。

火光は少しも動かない。

舞臺

此處は自分の舞臺だ。

此處は自分の舞臺だ、と、銘々手さぐり、足さぐりに暗闇してゐる、少しでもひろく、大きく見せやうと。

初めは見物も只ワイ／＼と喝采してゐる。

暫くすると、同じやうな手ぶり足どりに、少し倦いて來た

けれど、舞臺の人は氣がつかぬ。

其間に少しづつ舞臺は廻つてゐる。

只、自分の舞臺を失ふまいと、一生懸命に跳たり、踊つたりしてゐる、互に觸らないうちは大手を振て居る、觸ると攪み合ふ、斬り合ふ。
 其時分に見物はもう新しい背景と、新しい踊とを見て居る舞臺は廻つて了つた。
 けれども前の人は、前の背景を後ろにして、
 此處は自分の舞臺だ、
 此處は自分の舞臺だ、と、暗闘を續けて居る、前に見物は一人も居ないのに。

都會の足音

都會の中央の高い石造の家の窓に凭れて、聞いて居ると夕方でもない、朝でもない、午後三時頃のひびき、騒しくはないが倦怠いやうな、高くはないが重いやうな、旋律もない、和聲もない、單調で、波動の廣い音響が聞えて來る、都會が歩く足音だ。

又は緩やかに、又は忙しく、人の歩いてゐない通はないが一人々々自分の歩いてゐる足音には氣がつかぬ、土の上、

石の上、木の上、鐵の上を歩いてゆく人は、推しつ推されつしてゐる、自分の足音は知らぬ、人の足音も知らぬ。高い窓に聞ゆる足音は、一人や二人の足音ではない、大都會の歩いてゆく足音だ、大都會の足音は斯んなに高く遠く轟いてゆくけれど足跡は何處に残るのだらう、大都會を歩いて居る人の足音が一つも残らぬやうに、大都會の足音も亦一足／＼消えてゆくのであらう。

闇夜

星が空の底に沈んでゐる。
 晴れてゐて、
 こんなに闇の深い晩はない。
 一足歩いて、
 空虚を探ると物に觸りさうだ。
 鳥の寝息も聞えさう。
 木の幹が前を塞いでゐるさう。

竹藪が上から被さりさう。
 手さぐり、足さぐり、
 闇を闇に進んでゆく。
 何にも觸らない。
 何處までも夜の大氣の静寂に包まれた野原。
 物にさへぎられても恐ろしいが、
 はてのなき闇も心細らう。

力のない日

今日は何うして斯んなに力がないのだらう。
 物を持つと落しさうになる。
 眠いやうな、だるいやうな。
 靈魂が弱つてゐるのかしら。
 何かの前兆かしら。
 家には何事も無い。
 世間も静かだ。

晴れてゐるのに、光が鈍いやうに思ふ。

もつと眼を開いてみやう。

あら、とう／＼手からすべり落して盃を破つた。

無意味

お前の胸の中は私が知つてゐる。

言ふな、言ふな、何も言はない方が好い。

而して私が能く似合ふと言ふ紫が／＼つた白い薄い着物を

着て、いつでも忘れぬやうに白粉をつけて、美しくて居れ

ば好い。

言ふことがあれば、夏の雲は美くしい、夏の花はあかる

い、風が懐ろをさぐつていつたと云ふやうなことはかゝ言

へ。

外に何も言ふのではなし。

お前の言ふことは皆私が言ふてゐる。

泣きたくなつたら泣くが好い、それも黙つて――

嬉しくなつたら笑顔をすれば好い、歌を歌つて――

そして折々何か分らぬ意味のない言葉でささやいてくれ。

きもの

脱ぎ捨てた四五人の女の着物が室の中に堆くまろめられてある。

彩色のはれ々しい、觸感の柔かな、絹布の着物ばかりだ。燃えるやうな緋縮緬の長襦袢や、桃色の八橋のくけ紐や、一番下へ着る白の筒袖の半襦袢などには、未だ温味があるやうに見える。

納戸色の縮緬の新しい羽織と、栗色の羽二重の少し古びた

羽織とが、さも疲れたやうに用捨なく重なり合つてゐる。子供の着物は皆躍り出しさうだ、光淋と、明治と、元祿と、アールヌーボーと、四條派と、江戸と、西京との擬作が、單純な線と、色彩と、形とに現れてゐる、紅梅色の水や、白い大きな葉や、萌黄色した花や、子供の眼には不思議に美しく映るのであらう。

玉蟲色に輝く甲斐絹の下に、小紋縮緬がもとなしくうづくまつてゐる。胸の邊りが乳のやうに膨らんで、腰から下の方が一面に皺よつて、行儀をくづして了つた。

脱いでゐる女の着物の上には、なまめかしさと、あつたか

ごと、誘惑と、虚榮とが彷彿て居る、虚榮心、女に取つては命に代へても宜い虚榮心が、此處にも留守としてゐるのだ、女が歸つて來て着るのを待つてゐるのだ、美しい虚榮罪のない虚榮、着物だけ置いてある處を見ると、女の虚榮は許すべきものだと思ふ。

幾枚も重ねたまゝに袖が亂れて、入口から流れ落ちさうな水紅色が、能く女を語つてゐる。

閉切つた室には衣の香が籠つた、まだ外の光は明るいけれど、電燈を點けた、室の光線はバツト變つた、女の着物は

一時に夜の色に目覚めた、欺かれたる虚榮は更に美しく見えた。

花 瓣

都會などが此世に在らうと 思はれぬほど、空気が静寂に暮れて行く平野の一村、聞えるものは何もない。家も古い、人も古い、言葉も古い、森を離れやうとする月の光も古い。

盆踊の太鼓が鳴り出した。

ドコドン、ドコドン、ドコドコドンと緩やかに鳴り出した調子は次第にはづんで来る。

はづんで來ると花瓣が空中に踊つてゐるやうに想ふ。
 赤い花瓣や、桃色の花瓣がバツと咲いて、空に舞つて居
 る、思ひ思ひに踊つてゐる、ドンツと高く舞ひ上るかと思
 へば、ドコ、ドコ、ドコと落ちて來る。
 野も舊い、歌も舊い、戀も舊い、聲も舊い。
 定紋を描いた舊い提灯が一つ入つて來た、舊い家の舊い井
 戸から水を汲んで飲んで居る。
 花瓣は一度に皆地に落ちた、しづかに、さはやかに夜の空
 氣が沈む。
 また太鼓は鳴り出した、少し急ぎ込むやうな調子で。

燃ゆるやうな色は少し衰へたけれど、思ふまゝに花瓣は漂
 ふ、忽ち狂ふやうに、忽ち収るやうに、とぎれ／＼。
 木の葉には露が煌めいて居る、響の絶間は水の底に居るや
 うな静寂さだ、何うかすると力の無い、眠いやうな、沈ん
 だ響から、ふと覺めて、また明るい、高い調子になる。
 夜は深くなつた、もう何んな花瓣も夜の氣に恐れて縮むて
 あらう、太鼓も頓て打止むてあらう。

信濃町の月夜

廣い野原の一方の縁を縫ふて、僅に一臺か二臺か電車が走る、柱の火は淋しそくに輝いてゐる。

地下の停車場に能く馳る電車が着くと、着くと一瞬間に動き出す、其間に人が乗つて、人が降りるのであらう。地とすれすれの架空線が、忽ち強い痙攣を感じた、眼を射るやうな青い火が燃える、電車は地の下を通つて行つた。橋の上から見ると前にも、後にも小さな停車場がある。其

さきにもある、蒸気と吐く音、汽灌の動く響が聞える、汽笛が鳴る、長くつゞく汽笛と、短く急に鳴る笛とが、近くなつたり遠くなつたりする、架空線の線條は絶えず微かに顔ふてゐる。

遠い兵營の窓からは灯が洩れる、見えたり消えたりする、兵營の上に輝いてゐる月、原一面の霧が白い。

原の一部には廢線になつた軌道が其まゝ草に埋れてゐる、草が枯れて四條五條夜目にも地に線を引いてゐるが、其さは霧の中に消えて了ふ。

壊れた柵が何の爲ともなく残つてゐる、途は何うついで

るのか分らない、歩いてゆけば原になるばかりだ、二三本の柳の樹が此さは分らぬぞと云つたやうに並んで立つてゐる。

人の聲は全く聞えぬ、そしてものゝ響は刻々に迫つてゐる霧と月の外に一つのあかりも持たない原の一部に、都會から送つて来る光が輝いてゐる、電車は絶えず來往する。

眠つてゐる野原、覺めてゐる都會、近よりさうてまた別れる、其間を霧が立つ、月が更けてゆく。

山頭火

お前は山頭の火性だから、大きくなると何處まで大きくひろがるか分らぬ性質だと、幼少い時、能く祖母さんが言て聞かしてくれた。

何を對象とすれば大きくなれるかと思つた。

人間業でやることは皆つまらない、人間に逆も對象にならぬ。

況して人間の中の英雄豪傑君主聖人、少しもなつてみやう

と思はぬ。

そんなら神であらうか。

神に對する信仰の無いものが、神にならうとも思はない。

或る生命と云へば可い、或る力と云へば可い。

併し其等には形が無い、象のあるもので、我は何に對つて

大きくなればよからう。

神でもない、人でもない、何を對象とすれば大きくなれる

だらうと深く考へた。

自分だ、自分だ、自分ほど大きいものは無いと思つた時、

胸の火は燃え上つた。

非人間

憎い奴だ、嫌な奴だ、物も言ふまいと思つてゐる。

處が傍へ来て、親しく顔を見合すと、なまじひ人間の形體

をして居るだけに、物も言ふ、會話もする。

傍に居ないと矢張憎い奴だ、嫌な奴だ、人間の形體をして

ゐるやうに思はない。

成程、或る者を隠す爲に人間の形體が出来て居るのだ、露

はす爲ではなう。

いくら露はすと云つても、露はれないものが、底に深く沈んでゐる。

獨で居ると露はれてゐるが、二人になると隠れて了ふ、憎まれたものは幸ひだ。

三式

塀の外

大都會の中央に幾町かあらうと思ふ折廻した角邸宅、人が住んで居るのか、居ないのか、分らないやうな奥の方に母屋がある、土塀がある、離座敷がある、庭がある、廻らした樹立は森のやうだ。
其上に石を疊んで、土を塗つて、厚い塀で圍んである。塀の外に溝がある。
溝は浅い。

何處の子か知らぬ、三つ四つ位の男の子が溝に座つていた
づらしてゐる。

如何にも此處は自分の場所だと云ふやうに、喜悅に満ちた
顔をしてゐる。

森のやうな木立も、城のやうな塙も、此子供の前には何の
威嚴も無し。

夢の杜

若い男の夢が抜けて、

若い女の夢が抜けて、

同じ杜に姿を現はした。

或る一人は、或る一人に限つて語るであらうと信じて居た
のに、

若い男でさへあれば誰とでも語り、若い女でさへあれば誰

とても語るのて、一人一人の夢は、すどくと一人一人に

歸つて行つた。

表まで来た人

生垣は透いて居る、家の燈光は道路に洩れる、話聲も聞える、栗焼く香もする。

其晩は誰も来なかつた。

翌日はがさが来た「昨夜お目にかゝらうと思ひまして、御宅の表まで参りましたが、もうお目にかゝつたのも同じやうに思ひまして、又電車で本郷へ歸りました」と書いてきた。

自分はこの男が好きになつた。

生國は九州、短歌を好くした、大きな身體をしてゐながら面と向ふとろくに話もせず、明るいランプを持つてゆくと顔を背ける、女でも傍へ来やうものなら猶更小さくなる。

一度来たゞけであつた。

又九州へ歸つて了つた。

つぶて

生垣つゞきの舊い家や、まばら竹垣の新しい家もある原宿の邸宅町を、ぶら／＼歩いて居た。能く晴れた秋の日だ。

ハタと出會つたのは、もと新聞社に居た男だ、夏服らしい背廣を着て居る。

「やはり新聞社の方ですか」

「ハア社の方です、此邊に移轉て來たいと思ひますが、空

いた家で適當なのはありますまいか」

「然う、あるでせう、探して御覽なさい」

細君が出來たやうに思はれない、それとも母親とても住まうと云ふのか。

家賃のことなど二言三言話した、何の爲に家を探すかと深入りして聞くほどの親しい間柄でもない、一年餘り逢はなかつたから變つたことのあるには相違ない。

ハラ／＼と小石が降つて來て、二人の上へ落ちた。

上を見ると柿の木が枝を出して、赤い實が能く熟して居る。只「左様なら」と言つて別れた。

戀の詩

顔を見ると戀をしさうな男でない。
 話にしても女のことなどは殆んど言はない。
 それが詩を作つて來たので、見ると殆んど戀の詩ばかりだ
 戀をしないやうな顔をしてゐる彼が眞個か、戀の詩を作つ
 てくる彼が眞個か、疑つてみた。
 戯れに作つたのでは無いと知つた時に、暗い經歷を持つて
 居ると知つた時に、女の事などは半分も言はないて居て、
 戀の詩を作る人を憐れだと思つた。

空虚

淋しい眼と、淋しい眼とが冷たく疲れてゐる、冷却た水を
 飲むと、胸の下を流れてゆくのが分る。
 物足らぬ明るい火光のかけに、もう探すものはなく、渴仰
 に欺かれて、空虚なる大伽藍の石の床に、獨り取り残され
 た。

もらはうと思つた魂は、もらへるものではなかつた。また
 會はふとするまでには何んなに遠く動いてゆくか知れない

暮れたばかり

暮れたばかりの十字街。

赤い光と黒い影が動く。

留つてゐる電車の照燈の前を、黒い影法師が断續なしに走せ違ふ、人の飛び抜ける中を關はずに電車が動く、ボールが外れる、紫の火が落ちて来る、車臺は軌條を逸れさうにして曲つて行つた。

旗を捲いて燈火に代へた信號の青い火が赤くなつたり、赤

い火が青くなつたり、隠れたりする、けたましくベルが鳴つた、ゴム輪が舗石の上を浮いて行くと、女らしい白い脚だけが續いて走つた。

人が鳥のやうに電車の中に翔込んだ。

屋根の上のイルミネーションの色が、暫くの間も止つてゐない、色が代る、火が動く、呼吸するやうに。

黄色い霧が立つ。

星の輝いてゐることなどは、誰も知らない。

捲蕘の火の粉が溝の中で碎けた、橋の下に眼が光つてゐる。

荷をほどいた空箱と、小さなボール箱と、洋紙の屑と、細屑と、筋金とが往來に散らばつてゐる。

蓄音器の三味線が鳴り出した、流行唄をうたひ出した、キイ、キイ、と歌がさしる、聞いてゐた女の羽のシヨールが引かゝつて地に落ちた、馬の首が肩から覗いた。

硝子戸が開いた、フライの匂が風のやうに追いつて行つた。

物食べたさうな人が、暗い狭い路を覗くやうにして入つた。

郵便配達が黙つて人をつきのけて行つた、夕刊のチリン

チリンが一町もさきから駆て来る。

點いて間のない瓦斯の光の烈しいまたゝさのかけにも若

い男の鋭い眼には、若い女を見免すまいとしてゐる。

空が餘り早く暮れたので、僅に地上の火光を頼りに、行く

處に行き、歸る處に歸らうとして、浮足立つた人々の落着

て了うのを、夜の寂靜が待つてゐる。

① 肉 聲

薄い色絹をしごくやうな女の肉聲に心ふるふ。

何を語る。

何を歌ふ。

無意味の鳥の聲に聞惚れて、心が空に開く。

生きた聲の表情が胸に響いて、開けたピアノの上で落る花

瓣の快い響よ。

顔よりも、姿よりも、服粧よりも。

女の肉聲に亂れた心。

毛 髪

山門の仁王様の大掃除がある。

塵埃は山のやうに出た。

廣い寺の地面から掃寄せた落葉と一しよに、仁王様の塵埃

に火をつけた。

大きな草鞋がくすぼる、お札の白い紙片が燃え上る、繪馬

が焦げる、赤い布の色がかはる。

昨日の朝、淺黄の紋羽二重の羽織を被た女が一心に仁王様

に祈つてゐた。

若い女であつた。

眼を冥つてゐた。

白い顔であつた。

獨であつた。

暫く拜んでゐた。

仁王様の塵埃はなかく燃えない、霜に濡れた落葉が火氣に烟るばかり。

寺男は枯枝で塵埃の中をすけた、女の髪の毛が枯枝に纏ひついた、火は風を得て一時にバツと燃え立つた。

鼓の音

一步踏めば岩角、山彦は後に應へ。

一步踏めば木の根、山彦は前に應ふ。

山の魂、深林に吼え、小鳥を膝にした獨の縁の女、空に嘯く。

眼前に現出た林は、忽ち谷に落ちた。

峠は遙にまるみのある、線を俾ばして、雲に合ふ。

膝なる鳥は飛んだ。

大きい翼に山は隠れた。

鳥が去ると、山の果實はしたゝかに落ちた。

爽やかに葉の上を流れてゆく水が、皆女の裾にたまる、岩を飛ぶ緑の女は、飛んで、飛んで行方を見失ふ。

山は驚いた。

失ふた女を求める聲が、岩窟の奥から、朽木の空虚から、鳥の巢から、紫の花の底から、檜の枝から一時に起つて、木魂は一時に其相を現さうとした。

若氣

何處までも吾儘を通してみやうと飛出してみた。
外は暗い。

びしよくと雨が降つてゐる。

何處の家も閉てゐる。

此深夜にうろくしてゐる人間は一人もない。

誰も言葉をかけてくれるものがない。

街がある、家がある、戸がある、戸の内には室があつて、

寢床があつて、蒲團があつて、人は安らかに眠つてゐる。
 暗黒な夜に、眠つた街を歩いて見た處が、對手になつてく
 れる人もなければ、自分の居るべき場所も見當らぬ。
 地面は冷たい。
 細い雨に濡れながら、町を一廻りしてすごくと自分の家
 へ歸つて來た。
 吾儘は何にもならなかつた。通せない吾儘なら服従するよ
 り外に仕方がない。
 泣寝入りに寝入つた。

臆病

笑つて下さい、私は臆病なんです。
 遺傳でせう。
 私はあなたから誘惑されることを欣んでゐます、面白い機
 會を無言で過したことも知つてゐます。
 けれども、あなたと一しよに浮名を流さうとは思ひませ
 ん。
 ものゝあはれを知つてゐる者が、何うして戀とせず居ら

れませう、でなけりや詩は出来ません。
 私はもの足らぬ世の中に馴れました、實行の世の中へ行く
 ことは、下へ降りてゆくやうで氣持が悪いのです、負惜み
 かも知れません、人間以上の戯れのやうに思ふ時だけ、戀
 ても、詩でも、私には切實です。
 矢張囚はれてゐるのでせう、世間の人から見ると臆病なん
 てせう。

うたゝね

日が暮れない。
 壘の上でうたゝねをした。
 眼が覺めた。
 まだ長い夕暮が續いてゐる、何程も寝かつたらしい。
 眠る前にも何も思はなかつたが、起きても何も思ふことが
 なし。
 落たばかりの夕日の色が障子にあかい。

鳥が囁つてゐる。

私は斯うして何時までも静かにしてゐたい。

動くものは一つもない。

心も動かない。

今、大きな車輪が私の上を軌つて行ても、私は動かすに

たい——うたゝ寝の覺めた時——

近くのお寺で梵鐘が鳴り出した。

場末

日が暮れたばかりで、カンテラの灯が未だちちついてゐな
 50

草のやうな菜葉と、泥か石のやうな芋と、腐りかけた果實
 とが、店頭に並んである。

何の肉やら分らぬ赤い色の肉を切り盛りした皿からは、水
 の雫が垂れてゐる。

買ひたさうな人が彷徨してゐる。

カンテラの油煙は高く上つた。

少しの風に白い塵が立つた。

暗い火の間から大きな顔が動いた。

馬だ。

家とも、小舎とも分らぬ軒下に馬を繋いで、大きなバルカ

ンで馬の毛を刈つてゐる。

馬は神妙に四脚を揃へて立つてゐる。

魚の脂肪の火に落ちる臭がする。

道ゆき

此花を摘みませうか。

摘みませう。

あなたからち摘みなさい。

あなたが摘んで下さい。

では一しよに摘みませう。

いや、あなたから何うぞ。

今はよしませう。

よしますか、まだ後にもあるでせう。

あら、水だまりよ。

困りましたね、飛べますか。

さア。

私は先へ飛んで手を引いてあげますから、一、二、三と。

やア、泥水だ。

いけませんよ、衣服の裾が。

なに造作ありませんよ、さア手をお出しなさい。

待つて頂戴よ、私怖いから。

大丈夫です。さア早く。

待つて頂戴よ、何うしたら宜いでせう。

逡巡してゐますね、ぢやア此石と、草と。可し、これで宜

いでせう、此處へ片脚かけて。

ありがたう。

ほら、どつこいしよと。

あゝ怖かつた。

先へ入らつしやい。

細い道ね、

一人づゝしか歩けませんね。

全くだわ、二人歩くと落ちてしまふのね。

広い道は趣味がありませんね。

私、後になりますわ。

代るんですか。

ハア、待つて下さいよ。すべりさうだから。

宜しいか。

ハイ、何うぞ入らして下さい。

何だか險呑ですよ、河がありさうですよ

河？、威嚇しちや不可せん。

何だか然う想はれますね。

想はれるだけならようござんすけれど！。

在つたら何うします。

行ける處まで行きます。

また飛びますか。

飛びますよ。

塵 烟

灰色の烟のやうな大旋渦が地の上に吹き起る、風の底に塵が舞ふ、砂が飛ぶ。

烟が落ちる、ちぎれる、またかぶさる。

市街が暗くなる。

人が捲き込まれる。

乾風が陣を引いたかと思ふと都會の象が浮ぶ。

白い顔の女、藍がうつた色のシヨール。

裾を抑へてゐる。

再び来る、十字街頭の龍捲。

灰色の烟が舞ひ上ると、瞬間、美人の姿は消えて了ふ。

寒い日

寒い。

太陽は何處を歩いてゐるか分らない。

光は空一面に灑んでゐる。

手頭が麻痺れる。

皮膚の潤澤が涸れる。

息が白く。

往來が白く。

曝されたる家よ。

飢た男が往來を歩きながら、何でも木片があつたら燃やう

と思つてゐる。

火！と叫んだ。

酒と、女と、火と。

彼の顔は獣のやうになつた。

消えゆく日記

茲に書くことは、夢の中の事實もある、現の中の空想もある、皆取りとめのない消えゆく日記の片はしだ。
突然自分の右の胸の皮が外れた、胸の皮を透かして見ると半透明の雲母のやうでもあり、又白膠のやうでもある、厚さは一分許り、しらちやけた色、心もち癢がついて、少し彎形に反つて居るのは、胸の皮だからであらう、外れた縁は斜になつて、うまく嵌込まれるやうになつてゐる、そつ

と下に置く、次の室へ出た。
誰か持つて行きはしないかと氣になるので、戻つてみると驚いた、胸の皮は二つに割れてゐる、誰か踏んだのかも知れぬ、縫いでみるとうまく合ふ、微塵の隙もない、併し醫師に能く聞いて候めないと間違ふといけない、卓子の上に静に載せて次の室に出る。
暫く経つて又氣になるので、歸つてみると胸の皮は卓子の上に見えない、何處へ行たか知らと仰向いて視ると、前に二つに割られた胸の皮は、八つにも、九つにも破られて、一つ一つ端に小さな穴を穿け、梁の釘に、一つく掛けて

ある、大きいのもある、小さいのもある、誰が破つたのか
 分らぬ、縦合せて以前の通りになるか、それも分らぬ。
 此時まで気が着かなかつた、けれど自分の胸を見ると、皮
 を取り去られた跡は、肉が幾段にも畝を爲して、白い柔か
 さうな肉の上に、血が花のやうに染つてゐて、觸ると痛さ
 うだ、冷たい風が其間から吸込まれて、全身に廻る。

働くのは嘘だと思ふ、人間に交つてゐれば嘘でも働かねば
 ならぬ、あるだけの人間に嘘を云ふより、一人だけで可い
 から誠實を語つてやりたい、その一人が何う探してもな

いろ／＼探してみたら一人あつた、自分の子だ、自分の子
 の一人だ。

人間に歸らうと思はないから、一人の子を従へて山に登つ
 て行く、何處までも登つて行く、休んでは語り、語つては
 休む、少しも嘘を言はないでも、子供は面白さうに聞く、
 此子だけは人間になるのだと思ふ。

人間になつたら人間に歸れない、子供は山を降りたくない
 と云ふ、花を摘んだり、蟲を追ふたりして従いて来る、何
 處まで従いて来るだらう、今に歸りたいと言出すだらうと

少し懸念になつて、願返つてみると、少しも苦痛らしい表情が現れてない、やすく／＼と登つて来る、却つて自分が苦しさうだ、苦しさうではいけないと、心を平かにしてみる。

人の死ぬ際を見てゐる。

今、息を引取らうとする時に、病みほけた老女の肉は、次第に消え滅びて行く。

みる／＼肉は全く無くなつた。

骨の組織は人間と違ふ、魚のやうでもあり、獣のやうでも

ある。

骨だけになつて、人間の息はなくなつたのだけれど、まだ何處かに生きる力があると見えて、動き出した、動き出した、初めは獣の飛ぶやうに、後は鳥の飛ぶやうに、空中さして飛び去つて了つた。

後には何も残らない。

私の仕事は女の中でする仕事だ、見るもの、聞くもの、考へるもの、書くもの、皆女が傍にゐる、姿は見えないけれど、女の心持の中に生きてゐる。

私の家庭も女ばかりだ、女と一しよに語り、女と一しよに飯を喰ひ、女と一しよに寝る。

斯う女ばかりの中に生活してゐる間に、だん／＼女性化して了へば面白からう、男は何うしても女になれないけれど女ばかりの中に交つて、自若として、女を忘れたい。

都會の夜は闇として更け渡つた、闇の中を轟々と走る電車一臺、赤い電燈を點けてゐる。

乗つてゐるのは一人だけ、何となく恐ろしくて外を見る氣にならぬ。

電車は少しも停留らずに走る、風を切る響は、闇の中に残つて、後ろから大きなものが追駈けて来るやうだ、チリンチリンと鈴がひびく、何も無い、街樹の下蔭をすかし見て車掌は無言、つゞけさまに緒を引く。

機械が自然に動いてゐるだけで、人間が動かすと思へない紫の火が飛ぶ、赤い光がゆらめく、柱の上の光は疲れたやうに輝きがない、電車は停留ることを恐れるやうに走りつゞける、窓の外には陰森の氣が迫る、光の明るい車内の腰掛には、晝乗つた人々の幻覺があり／＼と浮ぶ、車掌は戦慄した。

押つ押されつの大群集、人の波、息の潮、脚は宙に浮く、胸が板のやうになる、後へも返されぬ、向ふへも進まれぬ、大地が轟く、人の言葉は大いなる合奏となつて、何の意味をもなさない。

人の群集か、動物の群集か分らぬ、只押される、押し返す暗い晩だ、火光が少い、暗い内に何か知ら揉み合つてゐるのだ。

是だけの人で踏み轟かしても、大地には何の足跡も印さない、潮のやうに人が引けば、都會は以前の寂寞に復る。

是だけの人が集つても、各自の考は、各自の考で分れてゐる、押すと、押されるとの外は何のつなぎもない、意味のない力だ、ばら／＼の力だ。

大群集の中に押込まれながら、自分は寂しい寂しい氣がした。

庇の間に往んでゐる猫が、二匹の子猫を産んだ、其内の一匹が屋根から落ちた、垣根を上るには爪が立たなかつた。親猫は折々降りて来て乳を哺ましてやる、親猫が屋根へ上ると悲しさに啼と廻つた、其聲を聞きつけた表の小犬は

好い玩弄物が出来たと云ふ風に子猫を弄んだ。
 親猫が唸ると犬は逃げた、居なくなると子猫をなぶつた。
 屋根へ歸ることの出来ない子猫は、遂に犬に殺されて了つ
 た、小さな體を地に横へた。
 小犬は是が何うして、動かなくなつたらうと、さも不思議
 さらな顔をして、半日許りも傍に居つてゐた、親猫はも
 う降りて來なかつた。

霧降る夜

ひやひやと霧降る宵の
街の樹は遠のく姿
家と家遙に對ふ

あざやがに背き栗頭ふ
街の灯の疲れし影に
消ゆる人現はるる人
書見たる文字の象も

色彩もありとや想ふ
すかし見る闇の深さに

霧さは彼方に消えて
大都會の輕やかに
海峯の底に沈みぬ

我いのち確かに置けど
浮城は今や千尋の
霧の海隠れてゆさぬ

秋の湖畔

男は二十、女は十六、しかも田舎で育つたから年齢より若く見えるので、兄妹と思つたのは至當だ、却つて宿帳に正しく妻と書いたのを怪んで、女中などはヒソ／＼と陰口をした、此夜の泊り客の噂は此二人の上に乗つたらしい。

「此を茶代に取つて置いて下さい」と一圓紙幣を二枚状袋に入れて擲り出したさき、宿賃も糺かねば、酒の注文もしない、亭主は頗る恐縮して、女中に吩咐て、初め通した

室から、更に幾室か奥まりたる此家の最上等の十畳の室に案内させた、此室には賈物の大幅も掛つてゐる、盆裁もある、碁盤もある、達柵の上には二年程前の文藝俱樂部が五六冊載せてある、蒔繪の衣桁と、西洋鏡臺は最も此室に光彩を放つもので、桐の長火鉢の餘り大きくないのも洒落れてゐる、亭主は敷居際まで来て幾度も辭義をして、此頃は思ふやうに魚が捕れないと云ふことを、くどくどお詫した、二人は亭主の辭を黙つて聞いてゐた、何の爲に此んなにお辭義をするのだらうと思つた、二人は泊りさへすれば好いので、魚が旨からうが、不味からうが、そんな事に氣

を掛けて居ない、成るだけ、人が傍へ來ないやうに願ひ、成るだけ他に物を言はないやうにして居たかつた。湯が湧いたと知らせに來たので、女から先に入つた、男も次いで入つた。湯は汚くもないが、二人とも水の嗅いのに閉口した。近江は美しい湖水を抱いてゐる、小波や滋賀の浦わの一夜泊りに、此んな嗅い水を使つてゐる家があらうとは思はなかつた、口を漱いで却つて心持を悪くした、茶をががつと呑んで、干菓子を摘んだ、米の粉を食べたやうで少しも甘くなかつた。

二人は長い廊下を傳つて、表の間へ出た。「お出掛でございませすか」と言ひながら、番頭は飛んで来た、二人の履物を揃へた、二人は何處へ行くとも言はないで、「ちよつと」と云つたまゝ、表へ出た。「おしづかに行つておいでやす」と二三人の女中の聞が後に残つた。

直ぐ後ろの石山寺へ参詣した、是は何とかの室、是は何とどの室と諸語的の説明を聞いても、一向若い者に寶物の有難味か分らなかつた、文學を愛する男は、紫式部とはもつと親しいやうな氣がしてゐたのに、餘りに時代と隔絶てゐると思つた、それよりは眼前の琵琶湖の方が美しかつた。鐘

を撞いてくれと云ふ鐘樓守のお婆さんが面白かつた、鐘を撞いてやつた、力が弱かつたので、また撞きなほさうとすると、お婆さんは一撞一錢だと云つた、幾撞でも好いと撞きなほした、女は傍で立つてみて居た。

山を降りて宿屋へ歸つた、初秋の氣は涼しくなつてきた、瀬田の橋が繪の通りに架つて居る、水がゆつくり流れて居る、頽廢した宿屋と、幾許か景氣の好い宿屋と、軒を並べて、夕方はそれ／＼活氣づいた、背中に團扇をさして白い塵埃に塗れた道者客が幾組も宿屋を覗いて行く、若い男女の泊つた宿屋には外に餘り客はなかつた。

晩の膳が出た、鰻を焼いたのが皿に入れてある、二人とも一箸も附けなかつた、吸物椀の蓋を取ると鯉の味噌汁であつた、一口眞似ばかり吸つたゞけて蓋をした、お茶碗をあけてみると鰻の白焼が入れてあつた、是も見たとけてあつた、二人とも川魚は大嫌ひであつた、仕機事なしに茄子の淺漬でお茶漬をゴソ〜と食べた、二人は別に失望したやうな顔もしなかつた、給仕を斷つた女中は出て來なかつた別の女中が來てお膳を下げて行つた、怪訝な顔をしてゐた。

御飯をしまつても、ちやんと其儘の姿勢で、若い男と、若

い女と對ひ合つた儘、にこりともしなかつた、女中は籠ランプを持つて來た、男は其籠を除けてランプを明るくした、寐轉んで方丈記を読み出した、女は暫くじつとしてゐたが、床の間に置いてあつた手提袋を持出して、其中から桃色のハンケチ、眉刷毛、懐中鏡、旅行用化粧道具など出して、一々丁寧に始末をした、男は女の化粧道具を珍しさうに見たが、又方丈記を読みつゞけた。

石山寺の秋の夜に折しも月は無かつたけれど、蟲の音は夜の更けるにつけて、呀えて來た、臺所に働く意味の無い女の笑ひ聲が、静かな室に聞えて來た、無口の男女は、其笑

ひ聲にさへ旅の情をしみくと感じた。

不意に廊下の外から「もうお床を取りませうか」と女中が聲を掛た、誰も来たやうな気色はないのに斯う云はれたので、二人は驚いて、只、ハアと返辭した、女中は直ぐ入つて来て床を取つた、そして「おやすみなさい」と言て出て行つた。

もう来ないだらうと思つてゐると、暫くして手に行燈を提げて入つて来て「就寝なさる時にランプの方をお消し下さい」と言つた、室を出る時に、障子を締めやうとして態と二人の方を眺めた。

衣桁には友禪の帯や、派手な帯揚げや、水色や、紫や、花や、蝶か亂れて掛つた、二人は低い笑ひ聲で何か囁いた、恐らく明日の朝まで、何人にも二人の沈黙を破られないことを欣んだのであらう、室は静になつた。

有明の燈火は自ら消えたか、人が吹消したか、それすら知らぬほど二人は熟睡した、眼を覺ました時には雨戸が皆あいて居て、障子の隙から日影がさして居た、下へ降りて例の嗅い水で顔を洗つた、朝の膳にも川魚が附いて居た、それでも吸物に浮いてゐた一片の蒲鉾があつたから助かつた。

近江八景も、琵琶の湖も、二人の若い心を止めなかつた、今日は此處を去つて、播磨の海岸に行かうと男は思つた、女は何處でもと言つた、男は旅行案内を繰つて、汽車の時間を調べた、その間に傍附て置いた車が來た。わざ／＼禮に罷り出た亭主は、幾度も／＼お魚のお詫をした。「あれでも精一杯氣を付けました積りてございますが、一向召上りませんで」と氣の毒さうに云ふ、此方が氣の毒になつて「ナニお世話になりました、又來ますよ」と腹一杯の挨拶をした。

番頭も女中も車の傍まで來て送り出した、二挺の車は朝風

に涼しい途を粟津の松原の方へ向つて走り出した、道の雨側の草は露に濡れてゐた。

後に何んな噂をして居やうと、二人の念頭にはそんな事が少しも無かつた、車の走る方へ二人の心は動いて行つた。

水が無い

水が無い、水が無いと云ふ聲は、村から村に響き渡つた。土用前から約四十日の間、一滴の雨も降らぬ、大和は水に騒がしい國だ、畿内平野に水が餘つて、もう雨は要らぬと云ふ時でも、桔槔が忙しい。河はあつても枝流ばかりで、あつるほどの水は、河を挿んだ兩方の村で争ふて引いて了ふ。何んな旱魃にも水の涸れないと云ふ村で共有の不汲井も、遂に村長の指揮の下に開くことゝなつた、平素は滅多に汲

んではならぬとしてある、石の蓋には錠が下りてある。開かれた井の水は、巖の底からでも湧くやうに冷たい、晩に汲めば朝は元の通りになる、朝に汲めば晩には元の通りになる、滾々として盡きない、井戸には番人が附いた。井戸だけではない池にも番人が附いて居る、池の水も大抵は灌き出して、底が見へさうになつてゐる、藻は泥の中で乾いて、枯草のやうになつてゐる、そんな池にすら番人が附く、況して不汲井には番人がつかねばならぬ。方々に起る水論や、小川の水を引く爲の俄の堀割工事や、雨乞やに村の若衆は忙殺されて、なか／＼井戸の番どころ

てはないのだけれど、番をしなければ水を盗まれる。餘儀なく女子供までもかりだされて、番人に命じられる、朝は暗い内から札取りで、汲ませること、極つたが、晝間の番より夜間の番が大變である。

小町と歌はれながら、雨を降らすことの出来ぬ阿園も、此番人の一人であつた。お園は村で評判の娘だが、水の爲に戦争のやうな村人は、女を顧る違もない。お園は夜の三時頃から起きて、よぼくと作爺さんと一しよに井戸の番をした。

水が無い、水が無いと云ふ聲は、ますます高くなるばかり

だ。

今一週間雨が降らなかつたら、大地は龜裂れて、稻の葉は燃えて了ひ、瓜の汁は吸はれて蜂の巢の壳のやうになり、草の葉も、木の葉も息の根が止つて了うだらうと云ふ騒ぎ。

無いと云つても帯ほどの水は流れてゐた飛鳥河さへ、上流へで堰るものだから、全く砂ばかりになつて了つた、上流へ行くと山に近いから水も段を打つて流れてくる、その川床が露出れて、大きな巖石や、小さな石に支えられた水の淀に、女の子や男の子が魚のやうに泳いで居る、水は其處で

止まつて、下流へは一滴も行かぬ。一時水が出た時には五里の間に三十何箇所か堤の切れたと云ふ飛鳥河も、一帯の砂原に化して、草が生へて居る。

夕方からは方々の山々で雨乞の炬火行列が行はれる、池を廻るのもある、山へ登るのもある。

爛々たる太陽も光を落して、空は水色に、山は藍色になると、山裾に一點の火が隠顯する、鎮守の火から移した最も神聖な火であらう、一點が二點となり、二點が三點となる、火の數が増加するほど、火は山を縫うて登つて行く、暫くのうちにはそれが金糸で綴つたやうに美しくなる、火は或る峠

まで達くと、先の方からそろ／＼山を降り初める、登る火と降る火が遠くから明かに見へる、動くとは見へないのに動いて居る。

お園は其妹や、弟や、母親等と一しよに家の窓から雨乞の火を眺めて居た、只、美しいと思つたゞけだ。

雨乞の効験があつたものか、翌日の午後四時頃から、山の頂上に怪しい雲が起つた、雲の上に雲が湧いた、見る／＼雲の脚は早くなつた。西の方は晴れて、東だけ曇つて來たのだから、日光は暑さうに射してゐるけれど、村人は一様に、雨、雨、雨と叫んだ。

一滴の水にも苦勞してゐる村の人達は、大夕立の來さうな空合を見て、手をつかねては居らぬ、手に手に鍬を持った、鋤を持った、杵杓を持った、蓑を出した、笠を下した、スワと言つたら、池、小川、溝の邊り、水の流れる處なら何處へでも駈附けて、少しでも多くの水を自分の田へ引入れやうと用意した。

手ぐすね引いて待つてゐるにも拘はらず、みめぐりの神は容易に雨を落さない、雲が騒いで、確に山の向ふは降つたらうと思はれるのに、此處ばかりは二粒か三粒か、水沫のやうに落ちたかと思ふと、雲は段々山際へ疊まれ、青い空

が廣くなるばかり、えゝつまらないと怨嗟の聲が起ると共に、村の人達は皆落膽したやうであつた。

お園は此騒ぎを茫然として見て居た。

お園は生れたまゝの女であつた、自分は女と云ふことより外に何も知らなかつた、不幸と云ふことも知らない代り、幸福を希ふと云ふことも知らなかつた、お園の一家は皆情の人であつた、圓滿であつた。

お園が生れてから一度も葬儀が出なかつた、婚禮もなかつた、お園は死と云ふことを見ることがない、生の慾を感じたこともない、只人生は斯うしたものだと思つてゐる。

村の若衆の間ではとりくに評判したけれど、お園は何も知らなかつた。

水が無い、水が無いと云ふ聲は、まだ絶えなかつた。

いくら水が無いと叫んでも、水は自然に湧出づるのを待つより仕方はないと、お園は人々の叫ぶ理由が分らなかつた、理由は分らなかつたけれど、井の番に出ることは拒まなかつた、お園は何事も拒み得る女でない。

毎朝、暗いうちから村の人は野に出て水を採した、お園は星のさらくしてゐるうちに出て行くのだけれど淋しくはなかつた。

奔命に疲れた村人は何うなるであらう、水はいつ地上を濕ほすであらう。